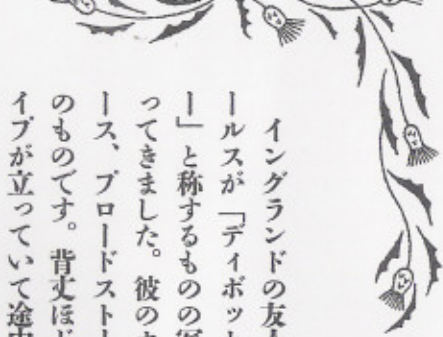


AZAMI あざみ の教え

上級より
ゴルフマナー
修得講座

AZAMI(藍)
スコットランドの国花。短い夏のラッパに咲く可憐な花。花のなかのボールを打とうとしたゴルファーを笑う様子はないのだとセント・アンドリュースの聖人ライリー卿が論じて、アンブレレナー小室吉三が「あざみ」という造語を考へたという逸話が残っている。

鈴木 康之
挿画 ● 唐仁原教久



イングリランドの友人、チャールズが「デイポット・ツリー」と称するものの写真を送ってきました。彼のホームコース、ブロードストーンGCのものです。背丈ほどの鉄パイプが立っていて途中三段四方にフックがあり、およそ三十個ほどの砂袋が吊り下げられています。そのかっこうを大葉が茂るツリーに見立てたのでしよう。

キャンバスらしい布袋で、本誌の短い辺のほうほどの四角。手ヒモはついていますが、マチはなくてベシヤンコです。そこに種子を混ぜた乾いた砂を入れてあります。ベシヤンコなのがアイデアらしく、袋

を傾げ、狭い口の角から砂をサラサラと注ぎ込む。「スペインやポルトガルではターフがバラバラになるけど、イングリランドやアイルランドでは土がついたままのターフがとれるので、元へ戻して隙間に目土し、踏んで平らにするんだ」と、彼は丁寧な男で、その手順を自演した何枚もの写真をメールに添付してよこしました。このツリーは私が最後に行った二〇〇三年にはありませんでした。

その時は、土産に「デイポット釘」を一袋くれました。土の中の虫を食いたがる鳥が戻したターフを割がしてしまふ。そこでターフの両端を止めようという一寸ほどの釘です。いざれ腐って土になる木材粉と肥料でできていました。「スグレモノだろう」と自慢していました。効果のほどは確かめていません。「デイポット・ツリー」は数年前からイングリランド南部のコースに現れたそうです。

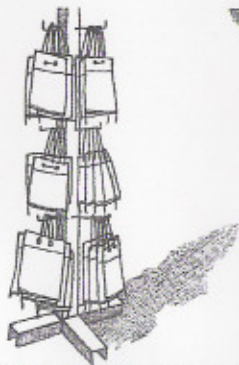
週刊「ゴルフダイジェスト」
(2008.12.23号)



さて、**関西の知人、上木良平**さんはオーストラリアへバカンスに行ったのですが、円高で暮らしやすいと帰ってこなくなりしました。不景気風の中で首をすくめて仕事している我々にほかほかゴルフ三昧の報告が頻繁に。そこに目土情報がありました。

ゴールドコーストGCのもので、こちらはバケツ・ツリーです。砂置き樽の脇に背丈ほどの鉄パイプが立ち、左右に三段、水平パイプが張り出して、それぞれに四、五個の小さなバケツがかかっています。

添付写真を見ると、いかにもカントリーな飾りつきのな



い風景です。上木さんは「この自然なさりげなさには長い伝統・歴史からくるものでしょうね」と書いています。

直径十五センチほどのバケツで、四、五回補修すると砂がなくなりそうですが、バケツ・ツリーはホール毎にありませす。手引きカートに引っ掛けても軽い。スコップは使わない。アイルランド式の握り



落とす?

「バケツを傾けて砂を落とすんです。もう慣れて、屈まなくても上手にデイポット跡に命中させられます。穴を見て砂の量の加減もできるようになりました。この技に限ってはもう5下シングルですよ」

親子連れをよく見かけるそうです。「親は子どもに最初

に打つ技術よりもマナーをちゃんと教えています」
今回は、ゴルフ大国アメリカの目土作法も見えない訳にはいかないでしょう。

「ゴルフの品格向上に」の一冊！
鈴木康之著
「ゴルフファアのスピリット」(小室吉三)

新刊刊・並製
定価900円税別

目土は世界に誇る 日本の礼法かも(中)

